

横光利一

機  
械





機

械



初めの間は私は私の家の主人が狂人ではないのかとときどき思った。観察しているとまだ三つにもならない彼の子供が彼をいやがるからと云って親父をいやがる法があるかと云って怒っている。畳の上をよちよち歩いていゝるその子供がばったり倒れるといきなり自分の細君を殴りつけながらお前が番をしていて子供を倒すと云うことがあるかと云う。見ているとまるで喜劇だが本人がそれで正気だから反対にこれは狂人ではないのかと思うの

だ。少し子供が泣きやむともう直ぐ<sup>す</sup>子供を抱きかかえて部屋の中を馳け廻っている四十男。此の主人はそんなに子供のことばかりにかけてそうかと云うとそうではなく、凡<sup>およ</sup>そ何事にでもそれほどな無邪気さを持っているので自然に細君が此の家の中心になって来ているのだ。家の中の運転が細君を中心にして来ると細君系の人々がそれだけのびのびとやって来るのももつともなことなのだ。従ってどちらかと云うと主人の方に関係のある私は此の家の仕事のうちで一番人のいやがることばかりを引き受けねばならぬ結果になっていく。いやな仕事、それ

は全くいやな仕事で然もそのいやな部分を誰か一人がいしかつもしていなければ家全体の生活が廻らぬと云う中心的部分に私がいるので実は家の中心が細君にはなく私にあるのだがそんなことを云ったっていやな仕事をする奴は使い道のない奴だからこそだとばかり思っている人間の集りだから黙っているより仕方がないと思っていた。全く使い道のない人間と云うものは誰にも出来かねる箇所だけに不思議に使い道のあるもので、此のネームプレート製造所でもいろいろな薬品を使用せねばならぬ仕事の中で私の仕事だけは特に劇薬ばかりで満ちていて、わ

ざわざ使い道のない人間を落とし込む穴のように出来上っているのである。此の穴へ落ち込むと金属を腐蝕させる塩化鉄で衣類や皮膚がだんだん役に立たなくなり、臭素の刺戟で咽喉のどを破壊し夜の睡眠がとれなくなるばかりではなく頭脳の組織が変化して来て視力さえも薄れて来る。こんな危険な穴の中へは有用な人間が落ち込む筈はずがないのであるが、此の家の主人も若いときに人の出来なない此の仕事を覚え込んだのも恐らく私のように使い道のない人間だったからにちがいないのだ。しかし、私とてもいつまでもここで片輪になるために愚ぐ図ずついていたの



では勿論ない。実は私は九州の造船所から出て来たのだがふと途中の汽車の中で一人の婦人に逢ったのがこの生活の初めなのだ。婦人はもう五十歳あまりになっていて主人に死なれ家もなければ子供もないので東京の親戚の所で暫くしほ厄介うづいになつてから下宿屋でも初めるはじのだと云う。それなら私も職でも見つければあなたの下宿へ厄介になりたいたいと冗談のつもりで云うと、それでは自分のこれから行く親戚へ自分と行ってそこの仕事を手伝わないかとすすめてくれた。私もまだどこへ勤めるあてとてもないときだしひとつはその婦人の上品な言葉や姿を信用

する気になつてそのままふらりと婦人と一緒にこの仕事場へ流れ込んで来たのである。すると、この仕事は初めは見た目は楽だがだんだん薬品が労働力を根柢こんていから奪つていくと云うことに気がついた。それで明日は出よう今日は出ようと思つているうちにふと今迄辛抱したからにはそれではひとつこの仕事の急所を全部覚え込んでからにしようと思つて来て自分で危険な仕事の部分に近づくことに興味を持つとつとめ出した。ところが私と一緒に働いているこの職人の軽部かるべは私わがが此の家の仕事の秘密を盗みに這入はいつて来たどこかの間者かんじゃ

だと思ひ込んだのだ。彼は主人の細君の実家の隣家から来ている男なので何事にでも自由がきくだけにそれだけ主家が第一で、よくある忠実な下僕になりすましてみる。ことが道楽なのだ。彼は私が棚の毒薬を手にとって眺めているともう眼を光らせて私を見詰めている。私が暗室の前をうろついているともうかたかたと音を立てて自分がここから見ているぞと知らせてくれる。全く私にとっては馬鹿馬鹿しい事だが、それでも軽部にしては真剣なんだから無気味である。彼にとっては活動写真が人生最高の教科書で従って探偵劇が彼には現実とどこも変らぬ

ものに見えているので、此のふらりと這入って来た私が  
そう云う彼にはまた好箇の探偵物の材料になって迫って  
いるのも事実なのだ。殊に軽部は一生此の家に勤める決  
心なばかりではない。ここの分家としてやがては一人で  
ネームプレート製造所を起そうと思っただけに自分  
よりさきに主人の考案した赤色プレート製法の秘密を私  
に奪われて了うことしまは本望ではないにちがいない。しか  
し、私にしてみればただ此の仕事を覚え込んでおくだけ  
でそれで生涯の活計を立てようなどとは謀たくらんでいるの  
では決してないのだが、そんなことを云ったって軽部に

は分るものでもなし、また私が此の仕事を覚え込んで了ったならあるいはひよっこりそれで生計を立てていかぬとも限らぬし、いずれにしても軽部なんかは何を思おうとただ彼をいらいらさせてみるのも彼に人間修養をさせてやるだけだとぐらいに思っておればそれで良よろしい、そう思った私はまるで軽部を眼中におかずにいると、その間に彼の私に対する敵意は急速な調子で進んでいて此の馬鹿がと思っていたのも実は馬鹿なればこそこれは案外馬鹿にはならぬと思わしめるようになって来た。人間は敵でもないのに人から敵だと思われることはその

期間相手を馬鹿にしていられるだけ何となく楽しみなものであるが、その楽しみが実はこちらの空隙くうげきになっ  
てい  
ることにはなかなか気附かぬもので私が何の気もなく椅子を動かしたり断裁機を廻したりしかけると不意に金槌かなづちが頭の上から落おつこって来たり、地金の真鍮板が積み重つたまま足もとへ崩れて来たり安全なニスとエーテルの混合液のザボンがいつの間にか危険な重クロムサンの酸液と入れ換えられていたりしているのが初めの間はこちら  
の過失だとばかり思っていたのにそれが尽ことごとく軽部の  
為業しわざだと気附いた時には考えれば考えるほどこれは油断

をしてしていると生命いのちまで狙われているのではないかと思わ  
れて来てひやりとさせられるようにまでなって来た。殊  
に軽部は馬鹿は馬鹿でも私よりも先輩で劇薬の調合にか  
けては腕があり、お茶に入れておいた重クロム酸アンモ  
ニアを相手が飲んで死んでも自殺になるぐらいのことは  
知っているのだ。私は御飯を食べる時でもそれから当分  
の間は黄色な物が眼につくとそれが重クロムサンではな  
いかと思われて箸がその方へ動かなかったが、私のそん  
な警戒心も暫くすると自分ながら滑稽になって来てそう  
手容たやすく殺されるものなら殺されてもみようと思うように

もなり自然に軽部の事などはまた私の頭から去っていった。

或る日私は仕事場で仕事をしていると主婦が来て主人が地金を買いにいくのだから私も一緒について行って主人の金銭を絶えず私が持っていてくれるようにと云う。それは主人は金銭を持つと殆どほん必ず途中で落して了うので主婦の気使いは主人に金銭を渡さぬことが第一であったのだ。いままでの此の家の悲劇の大部分も実に此の馬鹿げたことばかりなんだがそれにしてもどうしてこんなにかこの主人は金銭を落すのか誰にも分らない。落し



てしまったものはいくら叱しかったって嚇おどしたって返って来るものでもなし、それだからって汗水たらして皆が働いたものを一人の神経の弛ゆるみのためにことごとく水の泡にされてしまつてそのまま泣き寝入に黙っているわけにもいかず、それが一度や二度ならともかく始終持つたら落すと云うことの方が確實だと云うのだから此の家の活動も自然に鍛錬のされ方が普通の家とはどこか違って生長して来ているにちがいないのだ。いったい私達は金銭を持つたら落すと云う四十男をそんなに想像することは出来ない。譬たとえば財布を細君が紐ひもでしっかり首から懷へ吊して

おいてもそれでも中の金銭だけはちやんといつも落してあると云うのであるが、それなら主人は金を財布から出すときか入れるときかに落すにちがいないとしてみてもそれにしても第一そう度々落す以上は今度は落すかもしれぬからと三度に一度は出すときや入れるときに気附く筈だ。それを気附けば事實はそんなにも落さないのではないかと思われて考えようによつてはこれは或いは金銭の支払いを延ばすための細君の手ではないかとも一度は思うが、しかし間もなくあまりにも變つてゐる主人の拳動のために細君の宣伝もいつの間にか事實だと思つてし

まわねばならぬほど、とにかく、主人は変っている。金を金とも思わぬと云う言葉は富者に対する形容だがこの主人の貧しさは五銭の白銅を握って銭湯の暖簾のれんをくぐる程度に拘かかわらず、困っているものには自分の家の地金を買う金銭まで遣やってしまつて忘れている。こう云うのをこそ昔は仙人と云つたのである。しかし、仙人と一緒にいるものは絶えずはらはらして生きていかねばならぬのだ。家のことを何一つ任かしておけないばかりではない、一人で済ませる用事も二人がかりで出かけたりその一人のいるために周囲の者の労力がどれほど無駄に費

されているか分らぬのだが、しかしそれはそうにちがいないとしても此の主人のいるいないによって得意先の此の家に対する人気の相異は格段の変化を生じて来る。恐らく此処の家は主人のために人から憎まれたことがないにちががなく主人を縛る細君の締りがたとい悪評を立てたとしたところでそんなにも好人物の主人が細君に縛られて小さく忍んでいる様子と云うものはまた自然に滑稽な風味があつて喜ばれ勝ちなものでもあり、その細君の睨みの留守に脱兔だつとのごとく脱け出してはすっかり金銭を振り撒いて帰って来る男と云うのもこれまた一層の人気

を立てる材料になるばかりなのだ。

そんな風に考えると此の家の中心は矢張り細君にもなく私や軽部にもない おのずか 自ら主人にあると云わねばならなくなつて来て私の傭人根性が丸出しになり出すのだが、どこから見たって主人が私には好きなんだから仕様がな<sup>い</sup>。実際私の家の主人はせいぜい五つになつた男の子をそのまま四十に持つて来た所を想像すると浮んで来る。私たちはそんな男を思うと全く馬鹿馬鹿しくて軽蔑したくなりそうなものにも拘らずそれが見ていて軽蔑出来ぬと云うのも、つまりはあんまり自分のいつの間にか成長

して来た年齢の醜さが逆に鮮かに浮んで来てその自身の姿に打たれるからだ。こんな自分への反射は私に限らず軽部にだって常に同じ作用をしていたと見えて、後で氣附いたことだが、軽部が私への反感も所詮しよせんは此の主人を守ろうとする軽部の善良な心の部分の働きからであつたのだ。私が此処の家から放れがたなく感じるのも主人のその此の上もない善良さからであり、軽部が私の頭の上から金槌を落したりするのも主人のその善良さのためだとすると、善良なんて云うことは昔から案外良い働きをして来なかつたにちがいない。

さてその日主人と私は地金を買いにいった戻って来るとその途中主人は私に今日はこう云う話があつたと云つて云うには自分の家の赤色プレートの製法を五万円で売ってくれと云うのだが売って良いものかどうかと訊くので、私もそれには答えられずに黙っていると赤色プレートもいつまでも誰れにも考案されないものならともかくもう仲間達が必死にこっさり研究しているので製法を売るなら今の中だうちと云う。それもそうだろうと思つても主人の長い苦心の結果の研究を私がとやかく云う権利もなしそうかといつて主人ひとりに任しておいては主

人はいつの間にか細君の云うままになりそうだし、細君と云うものはまた目さきのことだけより考えないに決っているのを思うと私もどうかして主人のためになるようにとそればかりがそれからの不思議に私の興味の中心になって来た。家においても家の中の動きや物品が尽く私の整理を待たねばならぬかのように映り出して来て軽部までがまるで私の家来のように見えて来たのは良いとしても、暇さえあれば覚えて来た弁士の声色こわいろばかり唸うなっている彼の様子までがうるさくなつた。しかし、それから間もなく反対に軽部の眼がまた激しく私の動作に敏感にな



って来て仕事場にいるときは殆ど私から眼を放さなくなったのを感じ出した。思うに軽部は主人の仕事の最近の経過や赤色プレートの特許権に関する話を主婦から聞かされたにちがいないのだが、主婦まで軽部に私を監視せよといいつけたのかどうかは私には分らなかつた。しかし、私までが主婦や軽部がいまにもしかするとこっさり主人の仕事の秘密を盗み出して売るのではないかと思われて幾分の監視さえする気持ちになつたところから見ても、主婦や軽部が私を同様に疑う気持ちはそんなに誤魔化していられるものではない。そこで私もそれらの

疑いを抱く視線に見られると不快は不快でも何となく面白くひとつどうすることかつらつら凶々しくこちらも逆に監視を続けてやろうと云う気になって来て困り出した。丁度そう云うときまた主人は私に主人の続けている新しい研究の話をして云うには、自分は地金を塩化鉄で腐蝕させずにそのまま黒色を出す方法を長らく研究しているのだが、いまだに思わしくいかなのでお前も暇なとき自分と一緒ににやってみてくれないかと云うのである。私はいかに主人がお人好しだからと云ってそんな重大なことを他人に洩して良いものであろうかどうかと思いつながら、全

く私が根から信用されたこのことに対しては感謝をせずにはおれないのだ。いったい人と云うものは信用されてしまったらもうこちらの負けで、だから主人はいつでも周囲の者に勝ち続けているのであらうと一度は思ってみても、そう主人のように底抜けな馬鹿さにはなかなかなれるものではなく、そこがつまりは主人の豪えらいと云う理由になるのであるらうと思つて私も主人の研究の手助けなら出来るだけのことはさせて貰いたいと心底から礼を述べたのだが、人に心底から礼を述べさせると云うことを一度でもしてみたいと思うようになったのもそのときか

らだ。だが、私の主人は他人にどうこうされようなどとそんなけちな考えなどはないのだからまた一層私の頭を下げさせるのだ。つまり私は暗示にかかった信徒みたい  
に主人の肉体から出て来る光りに射抜かれてしまったわけだ。奇蹟などと云うものは向うが奇蹟を行うのではなく自身の醜さが奇蹟を行うのにちがいない。それからと云うものは全く私も軽部のように何より主人が第一になり始め、主人を左右している細君の何に彼かに反感をさえ感じて来て、どうしてこう云う婦人が此の立派な主人を独専して良いものか疑わしくなっただけばかりではなく出来

ることなら此の主人から細君を追放してみたく思うこと  
さえときどきあるのを考えても軽部が私に虐つらくあたつて  
くる気持ちを手にとるよう分つて来て、彼を見ている  
と自然に自分を見ているようです。またそんなこと  
にまで興味が湧いて来るのである。

或る日主人が私を暗室へ呼び込んだので這はい入つていく  
と、アニリンをかけた真鍮の地金をアルコーランプの  
上で熱しながらいきなり説明して云うには、プレート  
の色を変化させるには何んでも熱するときの変化に一番注  
意しなければならぬ、いまは此の地金は紫色をしてい

るがこれが黒褐色となりやがて黒色となるともうすでに此の地金が次の試練の場合に塩化鉄に敗けて役に立たなくなる約束をしているのだから、着色の工夫は総て色の变化の中段においてなさるべきだと教えておいて、私にその場でバーニングの試験を出来る限り多くの薬品を用いてやってみよと云う。それからの私は化合物と元素の有機関係を験しらべることにますます興味を向けていったのだが、これは興味を持たば持つほど今迄知らなかった無機物内の微妙な有機的運動の急所を読みとることが出来て来て、いかなる小さなことにも機械のような法則が

係数となつて実体を計つていることに氣付き出した私の唯心的な眼醒めの第一歩となつて来た。しかし輕部は前まで誰も這入ることを許されなかつた暗室の中へ自由に這入り出した私に氣がつくと、私を見る顔色までが變つて来た。あんなに早くから一にも主人二にも主人と思つて来た輕部にも拘らず新參の私に許されたことが彼に許されないのだからいままでの私への彼の警戒も何の役にも立たなくなつたばかりではない、うっかりすると彼の地位さえ私が自由に左右し出すのかもしれないと思つたにちがいないのだ。だから私は幾分彼に遠慮すべきだと云

うぐらいは分つていても何もそういちいち軽部軽部と彼の眼の色ばかりを気使わねばならぬほどの人でもなし、いつものように軽部の奴いつたいいまにどんなことをし出すかとそんなことの方が却って興味が出て来てなかなか同情なんかする気にもなれないので、そのまま頭から見降ろすように知らぬ顔を続けていた。すると、よくよく軽部も腹が立ったと見えてあるとき軽部の使っていた穴ほぎ用のペルスを私が使おうとすると急に見えなくなつたので君がいまさきまで使っていたではないかと云うと、使っていたってなくなるものはなくなるのだ、なけ



れば見附かるまで自分で捜せば良いではないかと軽部は云う。それもそうだと思つて、私はペルスを自分で捜し続けたのだがどうしても見附からないのでそこでふと私は軽部のポケットを見るとそこにちゃんとあつたので黙つて取り出そうとすると、他人のポケットへ無断で手を入れる奴があるかと云う。他人のポケットはポケットでも此の作業場にいる間は誰のポケットだって同じことだと云うと、そう云う考えを持っている奴だからこそ主人の仕事だつて凶々しく盗めるのだと云う。いったい主人の仕事をいつ盗んだか、主人の仕事を手伝うと云うこと

が主人の仕事を盗むことなら君だって主人の仕事を盗んでい  
るのではないかと云つてやると、彼は暫く黙つてぶ  
るぶる唇をふるわせてから急に私に此の家を出ていけと  
迫り出した。それで私も出るには出るがもう暫く主人の  
研究が進んでからでも出ないと主人に対してすまないと  
云うと、それなら自分が先きに出ると云う。それでは君  
は主人を困らせるばかりで何にもならぬから私が出るま  
で出ないようにするべきだと云つてきかせてやっても、  
それでも頑固に出ると云う。それでは仕方がないから出  
ていくよう、後は私が二人分を引き受けようと云うと、

いきなり軽部は傍にあったカルシユームの粉末を私の顔に投げつけた。実は私は自分が悪いと云うことを百も承知しているのだが悪と云うものは何と云ったって面白い。軽部の善良な心がいらだちながら慄ふるえているのをそんなにもまざまざと眼前で見せつけられると、私はまず舌舐したなめずりをして落ちついて来るのである。これではならぬと思いながら軽部の心の少しでも休まるようにと仕向けてはみるのだが、だいいち初めから軽部を相手にしていなかったのが悪いので彼が怒れば怒るほどこちらが恐わそうにびくびくしていくと云うことは余程の人

物でなければ出来るものではない。どうもつまらぬ人間ほど相手を怒らすことに骨を折るもので、私も軽部が怒れば怒るほど自分のつまらなさを計っているような気がして来て終いには自分の感情の置き場がなくなつて来始め、ますます軽部にはどうして良いのか分らなくなつて来た。全く私は此のときほどはつきりと自分を持てあましたことはない。まるで心は肉体と一緒にびったりとくつついたまま存在とはよくも名付けたと思えるほど心がただ黙々と身体の大きさに従つて存在しているだけなのだ。暫くして私はそのまま暗室へ這入ると仕かけておい

た着色用のビスマチルを沈澱さすため、試験管をとってクロム酸加里を焼き始めたのだが、軽部にとってはそれがまたいけなかったのだ。私が自由に暗室へ這入ると云うことがすでに軽部の怨みを買った原因だったのに、さんざん彼を怒らせた揚げ句の果に直ぐまた私が暗室へ這入ったのだから彼の逆上したのももつともなことである。彼は暗室のドアを開けると私の首を持ったまま引き摺り出して床の上へ投げつけた。私は投げつけられたようにして殆ど自分から倒れる気持ちで倒れたのだが、私のようなものを困らせるのには全くそのように暴力だけよりな

いのであるろう。軽部は私が試験管の中のクロム酸加里さんかりがこぼれたかどうかと見ている間、どうしたものか一度周章あわてて部屋の中を駈け廻ってそれからまた私の前へ戻って来ると、駈け廻ったことが何の役にもたたなかつたと見えてただ彼は私を睨みつけているだけなのである。しかしもし私が少しでも動けば彼は手持ち無沙汰のため私を蹴りつけるにちがいないと思ったので私はそのままいつまでも倒れていたのだが、切迫したいくらかの時間でもいったい自分は何をしているのだと思っただが最後までうぼんやりと間の脱けてしまうもので、ましてこちらは

相手を一度思うさま怒らさねば駄目だと思っ  
ていても相手もすっかり気の向くまで怒  
ってしまつた頃であろうと思つたとい  
私も落ちついてやれやれと云う気  
になり、どれほど軽部の奴がさきから  
暴れたのかと思つてあたりを見廻すと  
一番ひどく暴あらされているのは私の顔  
でカルシウムがざらざらしたまま唇  
から耳へまで這入っているのに気が  
ついた。が、さて私はいつ起き上  
つて良いものかそれが分らぬ。私は  
断裁機からこぼれて私の鼻の先に  
うず高く積み上つているアルミニ  
ウムニユームの輝いた断面を眺めな  
がらよくまア三日の間にこれだけ  
の仕事が

自分に出来たと驚いた。それで軽部にもうつまらぬ争いはやめて早くニュームにザボンを塗ろうではないかと云うと、軽部はもうそんな仕事はしたくはないのだ、それよりお前の顔を磨いてやろうと云って横たわっている私の顔をアルミニウムの切片で埋め出し、その上から私の顔を洗うように揺り続けるのだが、街に並んだ家々の戸口に番号をつけて貼りつけられたあの小さなネームプレートプレートの山で磨かれている自分の顔を想像すると、所詮は何が恐ろしいと云って暴力ほど恐るべきものはないと思つた。ニュームの角が揺れる度に顔面の皺しわや窪んだ骨



に刺さってちくちくするだけではない。乾いたばかりの漆が顔にへばりついたまま放れないのだからやがて顔も膨れ上るにちがいないのだ。私ももうそれだけの暴力を黙って受けておれば軽部への義務も果したように思ったので起き上るとまた暗室の中へ這入ろうとした。すると軽部はまた私のその腕をもつて背中へ捻<sup>ひ</sup>じ上げ、窓の傍まで押して来ると私の頭を窓硝子へぶちあてながら顔をガラスの突片で切ろうとした。もうやめるであろうと思っ  
ているのに予想とは反対にそんな風にいつまでも追っ  
て来られると、今度は此の暴力がいつまで続くのである

うかと思ひ出していくものだ。しかしそうなればこちらもたとえ悪いとは思つても謝罪する気なんかはなくなるばかりでいまままで隙があれば仲直りをしようと思つていた表情さえますます苦々しくふくれて来て更に次の暴力を誘う動因を作り出すだけとなった。が、実は軽部ももう怒る気はそんなになくただ仕方がないので怒っているだけだと云うことは分つているのだ。それで私は軽部が私を窓の傍から劇薬の這入っている腐蝕用のバットの傍まで連れていくと、急に軽部の方へ向き返つて、君は私をそんなに虐めるのは君の勝手だが私がいまままで暗室の

中でしていた実験は他人のまだしたことのない実験なので、もし成功すれば主人がどれほど利益を得るかしれないのだ。君はそれも私にさせないばかりか苦心の末に作ったビスムチルの溶液までこぼしてしまったではないか、拾え、と云うと軽部はそれなら何ぜ自分にもそれと一緒にさせないのだと云う。させるもさせないもないだいたい化学方程式さえ読めない者に実験を手伝わせただて邪魔になるだけなのだが、そんなことも云えないので少しいやみだと思ったが暗室へ連れて行って化学方程式を細く書いたノートを見せて説明し、これらの数字に従

って元素を組み合わせではやり直してばかりいる仕事に面白いならこれから毎日でも私に変わって貰おうと云うと、軽部は初めてそれから私に負け始めた。

軽部との争いも当分の間は起らなくなつて私もいづらか前よりいやすくなると暫くして、仕事が急激に軽部と私に増して来た。ある市役所からその全町のネームプレートト五万枚を十日の間にせよと云つて来たので喜んだのは主婦だが私たちはそのため殆ど夜さえ眠れなくなるのは分っているのだ。それで主人は同業の友人の製作所から手のすいた職人を一人借りて来て私たちの中へ混えな

がら仕事を始めることにした。初めの間は私たちは何の気もなくただ仕事の量に圧倒されてしまつて働いていたのだが、そのうちに新しく這入つて来た職人の屋敷と云う男の様子が何となく私の注意をひき始めた。無器用な手つきといい人を見るときの鋭い眼つきといい職人らしくはしているがこれは職人ではなくてももしかしたら製作所の秘密を盗みに来た廻し者ではないかと思つたのだ。しかし、そんなことを口にも出して饒舌しゃべつたら軽部は屋敷をどんな目に逢わすかしのので暫く黙つて彼の様子を見ていることにしていると、屋敷の注意はいつも

軽部の槽の揺り方にそそがれているのを私は発見した。屋敷の仕事は真鍮しんちゆうの地金をカセイソーダの溶液中に入れて軽部のすませて来た塩化鉄の腐蝕薬と一緒にそのとき用いたニスやグリユーを洗い落す役目なのだが、軽部の仕事の部分は此処の製作所の二番目の特長の部分なので、他の製作所では真似することは出来ないのだからそこに見入る屋敷とて当然なことは当然だとしても疑っているときのことでその当然なことがなお一層疑わしい原因になるのである。しかし、軽部は屋敷に見入られているとますます得意になって調子をとりつつ槽の中の塩

化鉄の溶液を揺するのだ。いつものことなら私を疑り出したように軽部とて一応は屋敷を疑わねばならぬ筈だのにそれが事もあるうか軽部は屋敷に槽の揺り方を説明して、地金に書かれた文字と云うものはいつもこうしてうつ伏せにするもので、すべて金属と云うものは金属それ自身の重みのために負けるのだから文字以外の部分はそれだけ早く塩化鉄に侵されて腐っていくのだと誰に聞いたものやらむずかしい口調で説明して屋敷に一度バットを揺すってみよとまで云う。私は初めはひやひやしなから黙って軽部の饒舌っていることを聞いていたのだがし

まいには私は私で誰がどんな仕事の秘密を知ろうと知らせるだけ良いのではないかと思ひ出し、それからもう屋敷への警戒もしないことに定めてしまったが、すべて秘密と云うものはその部分に働く者の慢心から洩れるのだと気がついたのはそのときの何よりの私の収穫であったであろう。それにしても軽部がそんなにうまく秘密を饒舌ったのも彼のそのときの調子に乗った慢心ふうぼうだけではない、確に彼にそんなにも饒舌らせた屋敷の風ふうが軽部の心をそのとき浮き上らせてしまったのにちがいないのだ。屋敷の眼光は鋭いがそれが柔くと相手の心を分裂さ



せてしまう不思議な魅力を持っているのである。その彼の魅力は絶えず私へも言葉を云う度に迫って来るのだが何にせよ私はあまりに急がしくて朝早くから瓦斯ガスで熱した真鍮うるしへ漆を塗りつけては乾かしたり重クロムサンア  
ンモニアで塗りつめた金属板を日光に曝して感光させた  
りアニリンをかけてみたり、その他バーニングから炭と  
ぎからアモアピカルから断裁までくるくる廻ってし続け  
ねばならぬので屋敷の魅力も何もあつたものではないの  
である。すると五日目頃の夜中になってふと私が眼を醒  
すとまだ夜業を続けていた筈の屋敷が暗室から出て来て

主婦の部屋の方へ這入っていった。今頃主婦の部屋へ何の用があるのであろうと思っっているうちに惜しいことはもう私は仕事の疲れで眠ってしまった。翌朝また眼を醒すと私に浮んで来た第一のことは昨夜の屋敷の様子であつた。しかし、困つたことには考えているうちにそれは私の夢であつたのか現実であつたのか全く分らなくなつて来たことだ。疲れているときには今までとてるときどき私にはそんなことがあつたのでなお此の度の屋敷のこととも私の夢かもしれないと思えるのだ。しかし、屋敷が暗室へ這入つた理由は想像出来なくはないが主婦の部

屋へ這入っていった彼の理由は私には分らない。まさか屋敷と主婦とが私たちには分らぬ深い所で前から交渉を持ち続けていたとは思えないのだしこれは夢だと思っっている方が確実であろうと思っっていると、その日の正午になつて不意に主人が細君に昨夜何か変つたことがなかつたかと笑いながら訊ね出した。すると細君は、お金をとつたのはあなただぐらいのことはいくら寝坊の私だつて知っているのだ。盗<sup>と</sup>るのならもつと上手にとつて貰いたいと澄まして云うと主人は一層大きな声で面白そうに笑い続けた。それでは昨夜主婦の部屋へ這入っていったの

は屋敷ではなく主人だったのかと気がついたのだがいくらいつも金銭を持たされないからと云って夜中自分の細君の枕もとの財布を狙って忍び込む主人も主人だと思いながら私もおかしくなり、暗室から出て来たのもそれではあなたかと主人に訊くと、いやそれは知らぬと主人は云う。では暗室から出て来たのだけは矢張り屋敷であるうかそれともその部分だけは夢なのであるうかとまた私は迷い出した。しかし、主婦の部屋へ這入り込んだ男が屋敷でなくて主人だと云うことだけは確に現実だったのだから暗室から出て来た屋敷の姿も全然夢だとばかりも

思えなくなつて来て、一度消えた屋敷への疑いも反対にまただんだん深くすすんで来た。しかし、そう云う疑いと云うものはひとり疑っていたのでは結局自分自身を疑つていくだけなので何の役にもたたなくなるのは分つているのだ。それより直接屋敷に訊ねて見れば分るのだが、もし訊ねてそれが本当に屋敷だったら屋敷の困るのも決つている。此の場合私が屋敷を困らしてみたとところで別に私の得になるではなしといつて捨てておくには事件は興味があり過ぎて惜しいのだ。だいいち暗室の中には私の苦心を重ねた蒼鉛そうえんと珪酸ジルコニウムけいさんの化合物や、主

人の得意とする無定形セレンニウムの赤色塗の秘法が化学方程式となつて隠されているのである。それを知られてしまえば此処の製作所にとっては莫大な損失であるばかりではない、私にしたつていままでの秘密は秘密ではなくなつて生活の面白さがなくなるのだ。向うが秘密を盗もうとするならこちらはそれを隠したつてかまわぬであろう。と思うと私は屋敷を一途に賊のように疑つていつてみようと思ひました。前には私は軽部からそのように疑われたのだが今度は自分が他人を疑う番になつたのを感じると、あるとき軽部をその間馬鹿にしていた面白さを

思い出してやがては私も屋敷に絶えずあんな面白さを感じさすのであろうかとそんなことまで考えながら、一度は人から馬鹿にされてもみなければとも思い直したりしていよいよ屋敷へ注意をそそいでいった。ところが屋敷は屋敷で私の眼が光り出したと気附いたのであろうか、それから殆ど私と視線を合さなくてすませる方向ばかりに向き始めた。あまり今から窮屈な思いをさせては却って今の中に屋敷を逃がしてしまいそうだしするので、なるだけのんきにしなければならぬと柔いでみるのだが眼と云うものは不思議なもので、同じ認識の高さでうろつ

いている視線と云うものは一度合すると底まで同時に貫き合うのだ。そこで私はアモアピカルで真鍮を磨きながらよもやまの話をすすめ、眼だけで彼にも方程式は盗んだかと訊いてみると向うは向うでまだまだと応<sup>こた</sup>えるかのよう<sup>に</sup>に光って来る。それでは早く盗めば良いではないかと云うとお前にそれを知られては時間がかかってしようがないと云う。ところが俺の方程式は今の所まだ間違いだらけで盗ったって何の役にも立たぬぞと云うとそれなら俺が見て直してやろうと云う。そう云う風に暫く屋敷と私は仕事をしながら私自身の頭の中で黙って会話を続



けているうちにだんだん私は一家のうちの誰よりも屋敷に親しみを感じ出した。前に軽部を有頂天にさせて秘密を饒舌らせてしまった彼の魅力が私へも次第に乗り移って来始めたのだ。私は屋敷と新聞を分け合って読んでいても共通の話題になると意見がいつも一致して進んでいく。化学の話になっても理解の速度や遅度が拮抗しながら滑めらかに<sup>すべ</sup>に<sup>すべ</sup>進んでいく。政治に関する見識でも社会に対する希望でも同じである。ただ私と彼との相違している所は他人の発明を盗み込もうとする不道德な行為に関しての見解だけだ。だが、それとて彼には彼の解釈の仕

方があって発明方法を盗むと云うことは文化の進歩にとつては別に不道德なことではないと思つてゐるにちがいない。実際、方法を盗むと云うことは盗まぬ者より良い行為をしているのかもしれない。現に主人の発明方法を暗室の中で隠そうと努力している私と盗もうと努力している屋敷とを比較してみると屋敷の行為の方がそれだけ社会にとつては役立つことをしている結果になつていく。それを思うとそうしてそんな風に私に思わしめて来た屋敷を思うと、なおますます私には屋敷が親しく見え出すのだが、そうかと云つて私は主人の創始した無定形

セレンニウムに関する染色方法だけは知らしたくはないのである。それ故絶えず一番屋敷と仲好くなつた私が屋敷の邪魔もまた自然に誰より一番し続けているわけにもなっているのだ。

あるとき私は屋敷に自分がここへ這入<sup>はい</sup>つて来た当時軽部から間者<sup>かんじや</sup>だと疑われて危険な目に逢わされたことを話してみた。すると屋敷はそれなら軽部が自分にそう云うことをまだしない所から察すると多分君を疑つて懲<sup>こ</sup>り懲<sup>ご</sup>りしたからであろうと笑いながら云つて、しかしそれだから君は僕を早くから疑う習慣をつけたのだと彼は擲<sup>から</sup>揄<sup>か</sup>

った。それでは君は私から疑われたとそれほど早く氣附くからには君も這入って来るなり私から疑われることに對してそれほど警戒する練習が出来ていたわけだと私が云うと、それはそうだと彼は云った。しかし、彼がそれはそうだと云ったのは自分は方法を盗みに来たのが目的だと云ったのと同様なものにも拘かかわらず、それをそう云う大胆さには私とて驚かざるを得ないのだ。もしかすると彼は私を見抜しいていて、彼がそう云えば私は驚しまいて了つて彼を忽たちまち尊敬するにちがいないと思つていたのではないかと思われて、此奴、と暫く屋敷を見詰めていたの

だが、屋敷は屋敷でもう次の表情に移ってしまつて上から逆に冠かぶさつて来ながら、こんな製作所へこう云う風に這入つて来るとよく自分たちは腹に一物いちもつあつての仕事のように思われ勝ちなものであるが君も勿論知つてのとおりそんなことなんかななかわれわれには出来るものではなく、しかし弁解がましいことを云い出してはこれはまた一層おかしくなつて困るので仕方がないから人々の思うように思わせて働くばかりだと云つて、一番困るのは君のように痛くもない所を刺して来る眼つきの人のいることだと私をひやかした。そう云われると私だつても

う彼から痛いところを刺されているので彼も丁度いつもの今の私のように私から絶えずちくちくやられたのであるうと同情しながら、そう云うことをいつも云っていないければならぬ仕事なんかさぞ面白くはなかりうと私が云うと、屋敷は急に雁首がんくびを立てたように私を見詰めてからふツふと笑って自分の顔を濁してしまった。それから私はもう屋敷が何を謀たくらんでいようと捨てておいた。多分屋敷ほどの男のことだから他人の家の暗室へ一度這入れれば見る必要のある重要なことはすっかり見てしまったにちがいないのだし、見てしまった以上は殺害することも出

来ない限り見られ損になるだけでどうしようも追いつくものではないのである。私としてはただ今はこう云う優れた男と偶然こんな所で出逢ったと云うことを寧ろ感謝すべきなのであろう。いや、それより私も彼のように出来る限り主人の愛情を利用して今の中に仕事うちの秘密を盗み込んでしまう方が良いのであろうとまで思い出した。それで私は彼にあるときもう自分もここに長くいるつもりはないのだがここを出てからどこか良い口はないかと訊ねてみた。すると彼はそれは自分の訊ねたいことだがそんなことまで君と自分とが似ているようでは君だ

つて豪<sup>えら</sup>そうなことも云っていられないではないかと云う。それで私は君がそう云うのも尤<sup>もつと</sup>もだがこれは何も君をひっかけてとやこうと君の心理を掘り出すためではなく、却って私は君を尊敬しているのでこれから実は弟子にでもして貰うつもりで頼むのだと云うと、弟子かと彼は一言いって軽蔑したように苦笑していたが、俄<sup>にわか</sup>に真面目になると一度私に、周囲が一町四方全く草木の枯れている塩化鉄の工場へ行つて見て来るよう万事がそれからだと云う。何がそれからなのか私には分らないが屋敷が私を見た最初から私を馬鹿にしていた彼の態度の原



因がちらりとそこから見えたと、思った。此の男はどこまで私を馬鹿にしていたのか底が見えなくなつて来てだんだん彼が無気味になると同時に、それなら屋敷をひとつこちらから軽蔑してかかつてやろうとも思い出したのだが、それがなかなか一度彼に魅せられてしまつてからはどうも思うように薬がきかなくただ滑稽になるだけで、優れた男の前に出るところもこつちが惨めにじりじり修業をさせられるものかと歎なげかわしくなつてくるばかりなのである。ところが、急がしい市役所の仕事が漸く片付きかけた頃のこと、或る日軽部は急に

屋敷を仕事場の断裁機の下へ捻じ伏せてしきりに白状せよ白状せよと迫っているのだ。思うに屋敷はこっさり暗室へ這入ったところを軽部に見付けられたのであろうが私が仕事場へ這入っていったときは丁度軽部が押しつけた屋敷の上へ馬乗りになって後頭部を殴りつけているところであった。とうとうやられたなと私は思ったが別に屋敷を助けてやろうと云う気が起らないばかりではない。日頃尊敬していた男が暴力に逢うとどんな態度をとるものかとまるでユダのような好奇心が湧いて来て冷淡にじつと歪む屋敷の顔を眺めていた。屋敷は床の上へ流

れ出したニスの中へ片頬を浸したまま起き上ろうとして  
慄ふるえているのだが、軽部の膝骨ひざほねが屋敷の背中を突き伏せ  
る度毎にまた直すぐべたべたと崩れてしまつて着物の捲まくれ  
あがつた太った赤裸の両足を不恰好ぶかつこうに床の上で藻搔もがかせ  
ているだけなのだ。私は屋敷が軽部に少なからず抵抗し  
ているのを見ると馬鹿馬鹿しくなつたがそれより尊敬し  
ている男が苦痛のために醜い顔をしているのは心の醜さ  
を表しているのと同様なように思われて不快になつて困  
り出した。私が軽部の暴力を腹立たしく感じたのもつま  
りはわざわざ他人にそんな醜い顔をさせる無礼さに対し

てなので、実は軽部の腕力に対してではない。しかし、  
軽部は相手が醜い顔をしようがしまいがそんなことに頓とん  
着ちやくしているものではなくますます上から首を締めつけ  
て殴り続けるのである。私はしまいに黙って他人の苦痛  
を傍で見ていると云う自身の行為が正当なものかどうか  
と疑い出したが、そのじつとしている私の位置から少し  
でも動いてどちらかへ私が荷担をすればなお私の正当さ  
はなくなるようにも思われるのだ。それにしてもあれほ  
ど醜い顔をし続けながらまだ白状しない屋敷を思うとい  
ったい屋敷は暗室から何か確実に盗みとったのであろう

かどうかと思われて、今度は屋敷の混乱している顔面の皺から彼の秘密を読みとることに苦心し始めた。彼は突っ伏しながらも時々私の顔を見るのだが彼と視線を合わす度に私は彼へだんだん勢力を与えるためにやにや軽蔑したように笑ってやると、彼もそれには参ったらしく急に奮然とし始めて軽部かるべを上から転がそうとするのだが軽部の強いと云うことにはどうしようもない、ただ屋敷は奮然とする度に強くどしどし殴られていくだけなのだ。しかし、私から見ていると私に笑われて奮然とするような屋敷がだいいいちもうぼろを見せたので困ったどん詰

りと云うものは人は動けば動くほどぼろを出すものらしく、屋敷を見ながら笑う私もいつの間にかすっかり彼を軽蔑してしまつて笑うことも出来なくなつたのもつまりは彼が何の役にも立たぬときに動いたからなのだ。それで私は屋敷とて別にわれわれと変つた人物でもなく平凡な男だと知ると、軽部にもう殴ることなんかやめて口で云えば足りるではないかと云つてやると、軽部は私を埋めたときのようにまた屋敷の頭の上から真鍮板しんちゆういたの切片きれはしをひっ冠かぶせて一蹴り蹴りつけながら、立てという。屋敷は立ち上るとまだ何か軽部にせられるものと思つたのか

恐<sup>こ</sup>わそうにじりじり後方の壁へ背中をつけて軽部の姿勢を防ぎながら、暗室へ這入ったのは地金の裏のグリユーがカセイソーダでは取れなかったらアンモニアを捜しにいったのだと早口に云う。しかし、アンモニアが入用なら何ぜ云わぬか、ネームプレート製作所にとって暗室ほど大切な所はないことぐらい誰だって知っているではないかと云ってまた軽部は殴り出した。私は屋敷の弁解が<sup>で</sup>出鱈<sup>たらめ</sup>目だとは分っていたが殴る軽部の掌の音があまり激しいのもう殴るのだけはやめるが良いと云うと、軽部は急に私の方を振り返って、それでは二人は共謀かと云

う。だいたい共謀かどうかこう云うことは考えれば分るではないかと私は云おうとしてふと考えると、なるほどこれは共謀だと思われたいことはないばかりではなくひよつとすると事實は共謀でなくとも共謀と同じ行為であることに気がついた。全く屋敷に悠々と暗室へなど入れさしておいて主人の仕事の秘密を盗まぬ自身の方が却つて悪い行為をしていると思つてゐる私である以上は共謀と同じ行為であるにちがいないので、幾分どきりと胸を刺された思ひになりかけたのをわざと凶太く構え共謀であらうとなかろうとそれだけ人を殴ればもう十分である



うと云うと今度は軽部は私にかかつて来て、私の顎あごを突き突きそれでは貴様が屋敷を暗室へ入れたのであると云う。私は最早や軽部がどんなに私を殴ろうとそんなことよりも今まで殴られていた屋敷の眼前で彼の罪を引き受けて殴られてやる方が屋敷にこれを見よと云うかのようで全く晴れ晴れとして気持ちが良いのだ。しかし私はそうして軽部に殴られているうちに今度は不思議にも軽部と私とが示し合せて彼に殴らせてでもいるようであるで反対に軽部と私とが共謀して打った芝居みたいに思われだすと、却ってこんなにも殴られて平然としていては

屋敷に共謀だと思われはすまいかと懸念され始め、ふと屋敷の方を見ると彼は殴られたものが二人であることに満足したものらしく急に元気になって、君、殴れ、と云うと同時に軽部の背後から彼の頭を続けさまに殴り出した。すると、私も別に腹は立ててはいないのだが今迄殴られていた痛さのために殴り返す運動が愉快になってほかほかと軽部の頭を殴ってみた。軽部は前後から殴り出されると主力を屋敷に向けて彼を蹴りつけようとしたので私は軽部を背後へ引いて邪魔をすると、その暇に屋敷は軽部を押し倒して馬乗りになってまた殴り続けた。私

は屋敷のそんなにも元気になったのに驚いたが幾分私が理由もなく殴られたので私が腹を立てて彼と一緒に軽部に向ってかかっていたいくにちがいないと思ったからである。しかし、私はもうそれ以上は軽部に復讐する要もないのでまた黙って殴られている軽部を見ていると軽部は直ぐ苦もなく屋敷をひっくり返して上になって反対に彼を前より一層激しく殴り出した。そうなると屋敷は一番最初と同じことでどうすることも出来ないのだ。だが、軽部は暫く屋敷を殴っていてから私が背後から彼を襲うだろうと思ったのか急に立上ると私に向かって突っかか

って来た。軽部と一人同志の殴り合いなら私が負けるに決っているのでまた私は黙って屋敷の起き上って来るまで殴らせてやると、起き上って来た屋敷は不意に軽部を殴らずに私を殴り出した。一人でも困るのに二人一緒に来られては私ももう仕方がないので床の上に倒れたまま二人のするままにさせてやったが、しかし私はさきからそれほどもいっただい悪行をして来たのであるうか。私は両腕で頭をかかえてまん丸くなりながら私のしたことが二人から殴られねばならぬそれほど悪いかどうか考えた。なるほど私は事件の起り始めたときから二人にとつ

ては意表外の行為ばかりをし続けていたにちがいない。しかし、私以外の二人も私にとつては意外なことばかりをしたではないか。だいいち私は屋敷から殴られる理由はない。たとえば私が屋敷と一緒に軽部にかからなかったからとは云え私をもそんなときにかからせてやろうなどと思った屋敷自身が馬鹿なのだ。そう思つてはみても結局二人から、同時に殴られなかつたのは屋敷だけで一番殴られるべき責任のある筈の彼が一番うまいことをしたのだから私も彼を一度殴り返すぐらいのことはしても良いのだがとにかくもうそのときはぐったり私たちは疲れ

ていた。實際私たちの此の馬鹿馬鹿しい格闘も原因は屋敷が暗室へ這入ったことからだとはいえ五万枚のネームプレート<sup>プレート</sup>を短時日の間に仕上げた疲労がより大きな原因になっていたに決まっているのだ。殊に真鍮を腐蝕させるとき<sup>と</sup>の塩化鉄の塩素はそれが多量に続いて出れば出るほど神経を疲労させるばかりではなく人間の理性をさええ混乱させてしまうのだ。その癖本能だけはますます身体の中で明瞭に性質を表して来るのだから此のネームプレート<sup>プレート</sup>製造所で起る事件に腹を立てたりしてはきりが無いのだがそれにしても屋敷に殴られたことだけは相手

が屋敷であるだけに私は忘れることは出来ない。私を殴った屋敷は私にどう云う態度をとるであろうか、彼の出方でひとつ彼を赤面させてやろうと思っっているといつ終ったとも分らずに終った事件の後で屋敷が云うにはどうもあゝのとき君を殴ったのは悪いと思つたが君をあゝのとき殴らなければいつまで軽部に自分が殴られるかもしれないなかつたから事件に終りをつけるために君を殴らせて貰つたのだ、赦してくれと云う。實際私も氣附かなかつたのだがあゝのとき一番悪くない私が二人から殴られなかつたなら事件はまだまだ続いていたにちがいないのだ。それ

では私はまだ矢っ張りこんなときにも屋敷の盗みを守っていたのかと思つて苦笑するより仕方がなくなりせつかく屋敷を赤面させてやろうと思つていた楽しみも失つてしまつてますます屋敷の優れた智謀に驚かされるばかりとなつたので、私も忌々いまいましくなつて来て屋敷にそんなにうまく君が私を使ったからには暗室の方も定めしうまくいったのであらうと云うと、彼は彼で手馴れたもので君までそんなことを云うようでは軽部が私を殴るのだから当然だ、軽部に火を点けたのは君ではないのかと云つて笑つてのけるのだ。なるほどそう云われれば軽部に火を



点けたのは私だと思われたって弁解の仕様もないのでこれはひよつとすると屋敷が私を殴ったのも私と軽部が共謀したからだと思っただけではなかろうかとも思われ出し、いったい本当はどちらがどんな風に私を思っているのかますます私には分からなくなり出した。しかし事実がそんなに不明瞭な中で屋敷も軽部も二人ながらそれぞれ私を疑っていると云うことだけは明瞭なのだ。だが此の私ひとりにとって明瞭なことともどこまでが現実として明瞭なことなのかどこでどうして計ることが出来るのであろう。それにも拘らず私たちの間には一切が明瞭に分つ

ているかのごとき見えざる機械が絶えず私たちを計っていてその計ったままにまた私たちを押し進めてくれているのである。そうして私達は互に疑い合いながらも翌日になれば全部の仕事が出来上って楽々となることを予想し、その仕上げた賃金を貰うことの楽しみのためにもう疲労も争いも忘れてその日の仕事を終えて了うと、いよいよ翌日となつてまた誰も全く予想しなかつた新しい出来事に逢わねばならなかつた。それは主人が私たちの仕上げた製作品とひき換えに受け取つて来た金額全部を帰りの途に落してしまつたことである。全く私たちの夜

の目もろくろく眠らずにした労力は何の役にも立たなくなつたのだ。然しかも金を受け取りにいった主人と一緒に私を此の家へ紹介してくれた主人の姉があらかじめ主人が金を落すであろうと予想してついていったと云うのだから、このことだけは予想に違たがわず事件は進行していたのにちがいないが、ふと久し振りに大金を儲けた楽しさからたとえ一瞬の間でも良い儲けた金額を持ってみたいと主人が云つたのでつい油断をして同情してしまい、主人に暫くの間その金を持たしたのだと云う。その間に一つの欠陥がこれも確実な機械のように働いていたのである

る。勿論落した金額がもう一度出て来るなどと思つてい  
る者はいないから警察へ届けはしたものの一家はもう青  
ざめ切つてしまつて言葉など云うものは誰もなく、私た  
ちは私たちで賃金も貰うことが出来ないのだから一時に  
疲れが出て来て仕事場に寝そべつたまま動こうともしな  
いのだ。軽部は手当り次第に乾板をぶち砕いて投げつけ  
ると急に私に向つて何ぜお前はにやにやしているのかと  
突きかかつて来た。私は別ににやにやしていたと思わな  
いのだがそれがそんなに軽部に見えたのなら或いは笑つ  
ていたのかしれない。確にあんまり主人の頭は奇怪だか

らだ。それは塩化鉄の長年の作用の結果なのかもしれない。それかもしれないと思ってみても頭の欠陥ほど恐るべきものはないではないか。そうしてその主人の欠陥がまた私たちをひきつけていて怒ることも出来ない原因になっていると云うことはこれは何と云う珍ちんき稀な構造の廻まわり方なのであろう。しかし、私はそんなことを軽部に聞かせてやっても仕方がないので黙っていると突然私を睨みつけていた軽部が手を打って、よしッ酒を飲もうと云い出すと立ち上った。丁度それは軽部が云わなくても私たちの中の誰かがもう直ぐ云い出さねばならない瞬間に偶然軽部が云っただけ

なので、何の不自然さもなく直ぐすらすらと私たちの気分は酒の方へ向っていったのだ。実際そう云う時には若者達は酒でも飲むより仕方がないときなのだがそれが此の酒のために屋敷の生命<sup>いのち</sup>までが亡くなるうとは屋敷だつて思わなかったにちがいない。

その夜私たち三人は仕事場でそのまま車座になって十二時過ぎまで飲み続けたのだが、眼が醒<sup>さ</sup>めると三人の中の屋敷が重クロム酸アンモニアの残った溶液を水と間違えて土瓶の口から飲んで死んでいたのである。私は彼を此の家へ送った製作所の者達が云うように軽部が屋敷を

殺したのだとは今でも思わない。勿論私が屋敷の飲んだ重クロム酸アンモニアを使用するべきグリユー引きの部分にその日も働いていたとは云え、彼に酒を飲ましたのが私でない以上は私よりも一応軽部の方がより多く疑われるのは当然であるが、それにしても軽部が故意に酒を飲ましてまで屋敷を殺そうなどと深い謀<sup>たくら</sup>みの起ろうほど前から私たちは酒を飲みたくなっていたのではないのである。酒を飲みたくなるときより私が重クロム酸アンモニアを造っておいだ時間の方が前なのだから疑い得られるとすると私なのにも拘らず、それが軽部が疑われ

たと云うのも軽部の先<sup>ま</sup>ずひと目で誰からも暴力を好むことを見破られる<sup>たくま</sup>逞<sup>そうぼう</sup>しい相貌から来ているのであろう。しかし、私とても勿論軽部が全然屋敷を殺したのではないと断言するのではない。私の知り得られる程度のこと  
は彼が屋敷を殺したのではないと云い得られるほどのことであるより仕方がないのだ。もともと軽部は屋敷が暗室へ忍び込んだのを見ているからは、彼を殺害する以外に彼に秘密を知られぬ方法はないと一度は私のように思ったであろうから。そうして私が屋敷を殺害するのなら酒を飲ましておいてその上重クロム酸アンモニアを飲ま



すより仕方がないと思つたことさえあることから考えても、彼もそのように一度は思つたにちがいないであろうから。だが、酒に酔つていたのは私と屋敷だけではなく、軽部とて同様に酔つていたのだから彼がその劇薬を屋敷に飲まそうなどとしたのではないであろう。よしと見え日頃考えていたことが無意識に酔の中に働いて彼が屋敷に重クロム酸アンモニアを飲ましたのだとするならそれなら或いは屋敷にそれを飲ましたのは同様な理由によつて私かもしれないのだ。いや、全く私とて彼を殺さなかつたとどうして断言することが出来るであろう。軽部

より誰よりもいつも一番屋敷を恐れたものは私ではなかったか。日夜彼のいる限り彼の暗室へ忍び込むのを一番注意して眺めていたのは私ではなかったか。いやそれより私の発見しつつある蒼鉛そうえんと珪酸けいさんジルコニウムの化合物に関する方程式を盗まれたと思ひ込みいつも一番激しく彼を怨んでいたのは私ではなかったか。そうだ。もしかすると屋敷を殺害したのは私かもしれぬのだ。私は重クロム酸アンモニアの置き場を一番良く心得ていたのである。私は酔いの廻らぬまでは屋敷が明日からどこへいつてどんなことをするのか彼の自由になってからの行動は

かりが気になつてならなかつたのである。しかも彼を生かしておいて損をするのは軽部よりも私ではなかつたか。いや、もう私の頭もいつの間にか主人の頭のように早や塩化鉄に侵されてしまっているのではなからうか。私はもう私に分らなくなつて来た。私はただ近づいて来る機械の鋭い先尖せんせんがじりじり私を狙ねらっているのを感じるだけだ。誰かもう私に代つて私を審さばいてくれ。私が何をして来たかそんなことを私に聞いたつて私の知つていよう筈はずがないのだから。



日本文学電子図書館

---

機 械

著 者：横光利一

制作者：宮澤一郎

底 本：「昭和文学全集 5」

川端康成 横光利一 岡本かの子  
太宰治  
小学館

昭和61年12月1日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館